HAYATO SUMINO

CONCERT TOUR 2024

KEYS

"KEYS"

今から約300年前、イタリアの技術者バルトロメオ・クリストフォリによってピアノは誕生しました。それから時間をかけて、鍵盤数の拡張やアクション機構の改良など、ピアノは数々の進化を遂げてきました。グランドピアノに限らず、さまざまな音色と形状を持つ鍵盤楽器が今もなお誕生し続けています。鍵盤さえ弾ければ音を鳴らすことができるというのは、鍵盤奏者で良かったと思うことの一つです。

色々な鍵盤楽器を使って音楽的実験を始めたのは、2020年頃のことでした。鍵盤という白黒の世界に、果てしない宇宙が広がっているのです。馬鹿馬鹿しいかもしれないけど、鍵盤に囲まれているだけで幸せでした。

今回は「KEYS」と名付けたプログラムをお届けしたいと思います。
前半は鍵盤"KEYS"の可能性を拡張した作曲家の作品に焦点を当て、後半はさまざまな鍵盤楽器"KEYS"を用いて音楽を構築します。皆さんにとって、なにか音楽の新しい扉を開く鍵"KEYS"を見つけるきっかけとなれたら、嬉しいです。

角野隼斗

Program

J.S. バッハ：
イタリア協奏曲 ヘ長調 BWV971

J.S. Bach :
Italian Concerto in F major BWV971

モーツァルト：
ピアノソナタ 第11番 イ長調 K.331「トルコ行進曲付き」

Mozart :
Piano Sonata No.11 in A major, K331 “Alla Turca”

角野隼斗：
24の調によるトルコ行進曲変奏曲

Hayato Sumino :
Turkish March Variation in All 24 keys

角野隼斗：
大猫のワルツ

Hayato Sumino :
Big Cat Waltz

ガーシュウィン（角野隼斗編曲）：
パリのアメリカ人

Gershwin (arr. Hayato Sumino) :
An American in Paris

ラヴェル（角野隼斗編曲）：
ボレロ

Ravel (arr. Hayato Sumino) :
Boléro

Hayato Sumino

角 野 隼 斗

2018年、東京大学大学院在学中にピティナピアノコンペティション特級グランプリ受賞。2021年、ショパン国際ピアノコンクールセミファイナリスト。これまでにポーランド国立放送交響楽団、ボストン・ポップス・オーケストラ、ハンブルク交響楽団、ブダフォク・ドホナーニ管弦楽団、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、パシフィックフィルハーモニア東京、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、日本センチュリー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団等と共演。2018年9月より半年間、フランス音響音楽研究所(IRCAM)にて音楽情報処理の研究に従事。これまでにジャン＝マルク・ルイサダ、金子勝子、吉田友昭の各氏に師事。MBS「情熱大陸」「一万人の第九」、NHK「紅白歌合戦」「あさイチ」「街角ピアノ」、テレビ朝日「徹子の部屋」「題名のない音楽会」など、数多くのメディアに出演。作曲家としてもNHK「サタデーウオッチ９」のテーマ曲をはじめ、ドラマやCMへの楽曲提供も積極的に行っている。2023年には全国16公演のツアーを開催し、約3万人を動員。2024年には、自身最大規模の全国23公演のツアーを開催。さらに24公演目として、自身の誕生日である7月14日(日)に日本武道館公演を開催することが決定している。CASIO電子楽器アンバサダー、スタインウェイアーティスト。クラシックで培った技術とアレンジ、即興技術を融合した独自のスタイルが話題を集め、“Cateen(かてぃん)”名義で活動するYouTubeチャンネルは登録者数が130万人超、総再生回数は1億回を突破。さらにFUJI ROCK FESTIVALや京都音楽博覧会への出演など、活躍の場はクラシックフィールドに留まらない。6人組シティソウルバンド“Penthouse”のメンバーとしても活動中。また、海外での活動が着実に増えており、ハンブルグ、ブルガリア、ブダペストなどでのオーケストラ共演や、フランス、ドイツ、ウィーン、ポーランド、中国、韓国などでリサイタルを開催し、現地の観客から称賛を得ている。現在は、拠点をニューヨークに移し、ボストン・ポップス・オーケストラとの共演でアメリカデビューを果たすなど、世界規模で活動を展開している。2020年、1stフルアルバム「HAYATOSM」をリリース。2022年には、マリン・オルソップ指揮、ポーランド国立放送交響楽団とのライブ録音による「ショパン：ピアノ協奏曲第1番」をリリースし、異例のヒットを記録。クラシックのピアニストとして確固たる位置を築く一方、ジャンルの垣根を越えた音楽の探究心で知られる、唯一無二のピアニストとして注目を集めている。

https://hayatosum.com/

© RYUYA AMAO

"Unlock New Musical Concepts"

角野隼斗の2024年日本ツアーのテーマは、「KEYS」。彼は、日頃さまざまな鍵盤楽器を弾いている。今回のツアーのプログラム前半は、グランドピアノ1台で演奏する。演奏される曲目は、「ざっくりと」時代順に並べられている。鍵盤楽器の歴史のような部分にも触れることができるであろう。

J.Sバッハ：イタリア協奏曲

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1675~1750）が作曲した《イタリア協奏曲》は、ダイナミックでとてもリズミックでもあり、特にその躍動感と音色の変化は大きな魅力となっている。チェンバロよりも、グランドピアノはさまざまな音色を出すことができる。当時のチェンバロのスタイルを踏襲しつつも、グランドピアノで弾く魅力を届けたいと彼は考えているのだろう。ドイツのアイゼナハ生まれのJ.S.バッハは、ヴァイマル時代にヴィヴァルディを中心としたイタリアの作曲家の協奏曲を、クラヴィーア用とオルガン用に編曲している。その結果、ソロのピアノ作品に協奏曲のスタイルをとり入れた。《イタリア協奏曲》には、急（ヘ長調）―緩（ニ短調）―急（ヘ長調）の3楽章構成やソロとトゥッティの対比の表現など、イタリアの協奏曲のスタイルにもとづいている。曲中にあるフォルテとピアノの指示は、ピアノ協奏曲のトゥッティと独奏のコントラストを意図しており、バッハは2段鍵盤のチェンバロを用いてこの効果を表現している。作品は、1735年刊行された《クラヴィーア練習曲集》第2巻に収められている。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ第11番「トルコ行進曲付き」

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）の時代になると、次第にフォルテピアノが浸透するようになる。チェンバロとは異なり、フォルテピアノでは音量の強弱をつけることができる。《ピアノ・ソナタ第11番「トルコ行進曲付き」》の第3楽章の「トルコ行進曲」では、打楽器的な表現を取り入れるなど、表現の幅の広がりをよく示している。

モーツァルトは、早くから生地ザルツブルクの大司教の宮廷音楽家として活動し、1781年以降はウィーンを拠点とした。彼は、そのピアノ・ソナタを1783年に完成させた。当時のウィーンでは、オリエンタル趣味が流行していた。このピアノ・ソナタの第3楽章は、トルコの軍楽隊の音楽を模している。

第11番のピアノ・ソナタのなかで、モーツァルトは新たな試みを模索している。この作品は、

ソナタ形式を含まないソナタで、以下のような構成となっている。
第1楽章／アンダンテ・グラツィオーソ イ長調。主題ののちに、6つの変奏が続く。
第2楽章／メルエット：イ長調。三部形式で、トリオではニ長調に転じる。
第3楽章／アッラ・トルティカ：アレグレット イ短調。楽譜の冒頭に「トルコ風に」と記されており、トルコの軍楽隊の音楽が用いられたロンド。

角野隼斗：24の調によるトルコ行進曲変奏曲

モーツァルトオリジナルの作品であるピアノ・ソナタ第11番「トルコ行進曲付き」が演奏された後は、トルコ行進曲を主題に用いた角野自身による変奏曲が演奏される。長調12調、短調12調が全て1回ずつ出現して構成される変奏曲で、今回のテーマであるKEYSを「調性」という意味で捉えたコンセプチュアルな作品だ。短い間隔で転調を繰り返すという特徴から、全体的にはロマン派音楽の性格が強いが、途中でラグタイム調やラテン調になったり、トルコ民族音楽の要素が加わったりと、角野独自のエッセンスも加わる。24の調と言えば、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》やショパンの《24の前奏曲》をイメージする人もいるだろう。また、24の変奏曲と言えばラフマニノフの《パガニーニの主題による狂詩曲》を思い浮かべないわけにはいかない。そうした作品へのオマージュも曲中に見出せるかもしれない。

1. イ短調
2. ハ長調
3. 変イ長調
4. イ長調
5. 嬰ヘ短調
6. 嬰ヘ長調
7. 嬰ニ短調
8. ロ長調
9. ニ長調
10. ト長調
11. ト短調
12. 変ロ長調
13. ハ短調
14. 嬰ハ短調
15. 変ニ長調
16. ヘ長調
17. ホ長調
18. ホ短調
19. ロ短調
20. 嬰ト短調
21. ニ短調
22. ヘ短調
23. 変ロ短調
24. 変ホ長調

角野隼斗：大猫のワルツ

後半の1曲目は、角野のオリジナル曲《大猫のワルツ》。彼は大きな猫を飼っている。そのうちの一匹、プリンにインスパイアされて完成したのが《大猫のワルツ》。文字通り、ワルツのスタイルに基づいた作品で、ショパンの《小犬のワルツ》を意識して作曲された。動物とワルツとの相性は良いと、角野は語る。このツアーでは演奏されないが、《小犬のワルツ》はショパンの恋人サンドの飼い犬が、自分の尻尾を追ってクルクル走り回る姿を音楽で表わしたと伝えられている。ちなみに、角野の愛猫プリンは、かなり大きいが、よく走り回る。

ガーシュウィン（角野隼斗編曲）：パリのアメリカ人

2023年4月、角野はニューヨークで生活を始めた。あの小さい島（マンハッタン島）に、いろんな国から多くの人々が来ていて、すべてのものが集まっている。そのような環境では、角野もマイノリティである。だからこそ、日本では接することができない音楽や人々にめぐり逢うことができる。それらはとても刺激的で、彼の創作のインスピレーションにもなっている。ニューヨークでいろいろ経験するなかで、その地に生まれ育ったジョージ・ガーシュウィン（1898 ～ 1937）の作品をこの日本ツアーで取り上げたいと角野は考えた。彼が選曲したのは、《パリのアメリカ人》である。
オーケストラのサウンドを彼ひとりが鍵盤楽器で表現するのだ。作品の魅力を引き出しつつ、オーケストラのサウンドに近づけたいとの角野の意欲が、ストレートに伝わってくるだろう。この作品は、ガーシュウィンがパリに旅行した時の印象をまとめ上げたオーケストラ作品。3つの部分で構成され、クラシック音楽を礎に、ジャズのエッセンスなどもとり入れられた、1928年の創作。オリジナルはオーケストラ作品であり、角野はこの作品のアレンジを手がけている。

ラヴェル（角野隼斗編曲）：ボレロ

2021年に開催されたショパン国際ピアノコンクール直後のインタビューで、角野は今後、取り組んでみたいことのひとつに、オーケストレーションを学ぶことをあげ、その理由として、「ピアノを弾いていると弦楽器の音が欲しくなるようなこともあります。ピアノでは表現でき

ない音ですから」と述べていた。実は、そのとき、モーリス・ラヴェル（1875～1937）の《ボレロ》についても、彼は次のように語っている。「ラヴェルのオーケストレーションって、天才的だと思うのです。それに、すごくいろんなエッセンスが詰まっている。《ボレロ》は（リズム動機が）ずっと一定です。どこで変化をつけるかというと、構成ではなく、オーケストレーションなのです」

ラヴェルの《ボレロ》のオリジナルは、オーケストラで演奏される。この作品は、ある種ミニマルな音楽で、メロディを別の楽器が次々と奏でていき、音楽はだんだん拡大していく。今回は、角野自身によって1人で演奏可能なように編曲されたヴァージョンが演奏される。複数の楽器を活用し、その他にも、アプライトピアノに細工を施し、多彩なサウンドの創出をめざす。

角野がこの作品を初めて聴いたのは、6、7歳のころ。それ以来、《ボレロ》の調べは、なじみ深いメロディとして彼のなかにある。大人になって改めて考えたとき、これだけシンプルで、淡々と繰り返されるたびに色鮮やかでユニークな音楽になることに、彼は驚きを覚えた。音楽の基本は、繰り返しである。音楽の起源はリズムであると言われているが、原住民がひたすらリズムを叩いて一定のモティーフが繰り返されるのを聞くと、人は興奮するようにできているような気がするという。だからこそ、repetitive …繰り返しは、音楽の根源ではないであろうか。それをクラシック音楽としてカラフルにしたラヴェルの凄さ！それをピアノ一台で表現するのには限界がある。でも、そこを角野はやってみたくなったのである。

ラヴェルは、フランスの作曲家。彼の母の出自がバスク系で、彼はスペイン音楽に関心を寄せていた。ボレロは、スペイン由来の舞踏。彼の《ボレロ》は、舞踏家イダ・ルビンシテインからバレエ音楽の作曲の依頼を受け、1928年秋に書き上げられた。弱音から強音へと至るひと筋のクレッシェンドの上で、小太鼓はボレロのリズムを刻み続ける。2つのメロディがさまざまな楽器によって弾き継がれ、音楽は次第に高揚していく。

文：道下京子

Privia PX-S7000

彩る、そのスタイル

ピアニスト角野隼斗が選んだのは
Priviaの洗練されたデザインと上質な響き

#部屋活ピアノ
角野隼斗スペシャルページ

CASIO Music Japan
Instagram

Privia
スペシャルサイト